

放射線科医から死後画像診断 (Ai : Autopsy imaging) の現状

前原 純樹[†]第77回国立病院総合医学会
2023年10月20日 於 広島

IRYO Vol. 78 No. 6 (374-378) 2024

要旨

死後画像診断 (Autopsy imaging ; Ai) は, CT (Computed tomography) の技術的進歩や普及を背景として, およそこの20年間で広く用いられるようになった. 日本は欧米諸国と比べ異状死体に対する解剖率が著しく低い. また, 昨今のコロナ禍の影響により減少してしまった病理解剖を補うという意味でも, 死因究明のために Ai の果たす役割は重要である. Ai の利点としては, 病理解剖と比較してコストや医療スタッフの身体的負担が少ない点が挙げられる. 結果の判明までの時間が短い点もメリットである. 病理解剖では最終的な診断確定に通常1から数カ月程度要するのに対し, Ai は撮影した当日もしくは翌営業日には読影報告書が完成する. 迅速な結果判明により, 患者遺族ならびに治療に携わった医療スタッフが納得を得ることができるのが Ai の意義である. 一方で, Ai による死因の解明には限界がある. 現時点での Ai による死因判明率は30%前後と決して高くない. 頭蓋内出血や大動脈破裂などの出血性病変に関しては正確に評価できる反面, 心筋梗塞や肺塞栓, 内因性要因については画像での評価が難しい. Ai による画像診断は発展途上であり, 所見の評価, 解釈について画像診断医間で意見が一致しないことがある点にも留意すべきである. 本講演では, 自施設における Ai 撮影の実状についても紹介し, 病理解剖数が減少傾向を示す現状と, Ai に求められる役割と今後の展望についても述べる.

キーワード 死後画像診断, CT, 病理解剖

はじめに

死後画像診断 (Autopsy imaging, Ai) とは, 患者の死因や死に関与した病態を調べる目的に, 遺体を用いて画像検査を行うことである. 日本では, 他の先進国と比べ剖検率が著しく低い一方で, CT 撮影装置が広く普及しているという背景から, Ai は

死因検索のための有効な手段である. 本稿では, Ai の概要, 病理解剖との違い, 画像診断において評価できることや出来ないことを解説し, 自施設である国立病院機構九州医療センターにおける Ai 撮影の実状についても紹介する.

国立病院機構九州医療センター 放射線科 [†]医師
著者連絡先: 前原純樹 国立病院機構九州医療センター 放射線科
〒810-0065 福岡県福岡市中央区地行浜1丁目8-1
e-mail: ddprogress@hotmail.co.jp
(2024年3月27日受付 2024年6月14日受理)
Current Status of Autopsy Imaging from a Radiologist's Perspective
Junki Maehara NHO Kyushu Medical Center
(Received Mar. 27, 2024, Accepted Jun. 14, 2024)
Key Words: autopsy imaging, computed tomography, pathological autopsy